虚子記念文学館投句特選句・令和八年十月

稲畑廣太郎　選

それぞれの風を織り上げむら紅葉　岡山　石井宏幸

俳碑は詩の曼荼羅秋の声　京都　西村やすし

十三夜次の忌日へ旅支度　兵庫　藤井啓子

蒼天へもつれ合ふ黒秋の蝶　岡山　辻田詔子

団栗のどこへも落ち着かぬかたち　千葉　志村　肇

秋晴の俳碑の文字くつきりと　兵庫　柄川武子

雲流る定めのままに秋思かな　兵庫　河野ひろみ

タッパーの蓋のくねりや運動会　大阪　椋本望生

暗闇が追ひかけてくる秋の暮　東京　清水あき

離れゆく汽笛の嗄声秋の海　兵庫　武田奈々

（青少年）

入選句・令和八年十月

色鳥の来てゐる森のレストラン　奈良　山口廣世
木洩日の揺れをつかまへ水引草　岡山　伴　明子
対岸に恐山見え馬肥ゆる　大阪　白石　翠
今日三日柿大好きな父忌日　兵庫　細田清子
色鳥や仮寝の中へついて来し　兵庫　足立朱麻
雁渡る飛行機雲の道残し　三重　前出公子
秋灯の繋ぐ単線無人駅　三重　前出美千子
虫の音に呑み込まれゆく鳥塒　大阪　若林友子
秋晴の歩道橋より芦屋浜　兵庫　谷本逸歩
運動会誘ひの電話行く事に　大阪　谷本房子
荒波を越えて大和の雁となる　三重　池本準一
爽やかに指揮者袖よりアンコール　三重　中島庸子
秋高し猿沢池の七不思議　奈良　堀田ますみ
秋の声万葉人の歌碑めぐる　奈良　堀田建夫
日だまりにどこか揺れをり秋桜　大阪　米澤悦子
秋の灯や高齢となる誕生日　三重　居附秀峰
渋も甘もなべて里曲の秋の色　大阪　吉井清子
振付け師ゐる如椋鳥の群舞　兵庫　西村みどり
秋晴や撫でゆく風の芦屋川　兵庫　黒田千賀子
何もかも泣いてゐるやう秋の雨　兵庫　宮本露子
秋の暮早々灯る先斗町　兵庫　上岡あきら
待ち侘びし秋晴の日や何をせん　兵庫　村原美可
初紅葉庭師は梯子立てしまま　兵庫　山之口倫子
秋晴や連覇果せしタイガース　兵庫　森岡喜惠子
国生みの島引き寄せて秋晴るる　大阪　ふじもと言果
ふはり飛ぶ夫に付き来し秋の蚊は　兵庫　吉田知子
秋晴やあの日もこんな空でした　兵庫　近藤六健
掛軸の白洲正子や猿茸　大阪　北上美佐子
秋晴やラヴェルのボレロ洩るる館　岡山　田口ひさえ
ジェスチャーに譲られし席爽やかに　大阪　河村久美子
星屑のこぼれ零余子の実りかな　兵庫　髙野さち
どの風もじやれてゆきたる狗尾花　大阪　杉山千恵子
善光寺宿坊の庭初紅葉　兵庫　小川孝子
太陽が大きいけふの秋の晴　兵庫　川村ひろみ
ばつた跳ぶ旅の行方は風まかせ　兵庫　武田優子
はたはたの飛躍予想外の高さ　大阪　西尾浩子
虚子館に流るる時間薄紅葉　徳島　奥村　里
薄紅葉夕に近づくほどに濃く　京都　木村直子
万葉の小径彩る薄紅葉　兵庫　涌羅由美
この城の栄華は知らず鰯雲　香川　三宅久美子
千枚田オーナーとして稲を刈る　石川　白根寿子
爽やかや昔語りのオルゴール　兵庫　奥田好子
トントンと聞こゆ秋雨と俳句の音　兵庫　石橋克祥
すぐ崩れ大漁ならず鰯雲　鳥取　椋　誠一朗
一口に言葉失ひ今年米　大阪　多田羅紀子
日を拾ふ枝に始まる薄紅葉　香川　葛原由起
秋晴や街並み巡るハイヒール　大阪　三友元子
揺れるるも芯のゆるがぬ吾亦紅　鳥取　椋　則子
詩心を育てるものに秋の雨　兵庫　玉手のり子

草の露踏み波音を聞く岬　石川　辰巳葉流
同窓と酌みて夜長を短うす　京都　山﨑貴子
小学生にもあるらしき愁思かな　兵庫　深尾真理子
虚子館の歴史と共にある紅葉　大阪　林　曜子
笑み囲むライスシャワーや小鳥来る　兵庫　永沢達明
吊られたる猪の眼の語るもの　鳥取　前田　千
銀杏散り幹真つ直ぐに天を指す　徳島　多田まさ子
明けてゆく砂丘秋風いづこより　兵庫　岸川佐江
前線の消えて秋耕始まりぬ　千葉　野末トヨ
秋の旅「思い出」と言うは大人ばかり　千葉　鹿野川小舟
新米の命尊し日本晴　京都　杉森大輔
法師蝉あかがねの山惜しみ鳴く　奈良　堀ノ内和夫
散髪のあとの秋風よく喋る　熊本　夏風かをる
花芒カーブに出張り過ぎてをり　茨城　杉山　滿
試験より夜食めざして勉強し　愛知　海神瑠珂
復興の灯つつむ秋の暮　兵庫　福田光博
素風あり我が身ひかりとなりにけり　岐阜　丸山美樹
ふる里の御食国なる稲穂かな　大阪　富永武司
峪紅葉ぼくを丸ごと染めてゆく　大阪　深森明鶴
単線の踏切越えて秋祭　大阪　深森佳鶴
添水の音静寂を刻む二尊院　兵庫　池田文子
日を重ね丹精重ね菊の晴　大阪　河辺さち子
逡巡の無き香二つに檸檬切る　京都　前　悦子
今鳴りて遠き世の音添水かな　大阪　須知香代子
袖口に触れて伝はる秋の濃さ　大阪　森重深鶴

秋の日に母と並んで黒玉子　神奈川　斉藤苑子
敬老の日子の足形の葉書着く　石川　杉村佳津子
稲刈って向かうに道の現れし　兵庫　松本　敬
訳ありの訳は聞かない林檎にも　埼玉　吉田春代
晩酌に合はせたやうにちちろ虫　兵庫　天下明太郎
餌箱に少し欠けあり秋の暮　三重　瀬川琴女
跳び退きて夕陽を弾く飛蝗かな　大阪　坂口うらら
途中から本物の嘘百舌鳥の声　静岡　いたまき芯
秋天の隅の隅までひと色に　兵庫　松浦百重
手づかみの魚の死二十三夜月　大阪　押見げばげば
縁談と新酒引っ提げ兄の来る　埼玉　小田毬藻
椿の実落ちて水面に波丸く　兵庫　道中義臣
小粒とも高貴な彩よ実むらさき　兵庫　山口弘子
松茸の丹波産よと念押され　兵庫　三木雅子
僂げに佇むごとく思草　兵庫　高橋純子
帰り花せし川添ひや三極館　兵庫　辻田あづき
やや寒やレトロ喫茶の焦げしパン　兵庫　高市敦之
指で見るパスタの固さ十三夜　兵庫　岩永靜代
虫の夜や消した画面が顔になる　東京　とたなのど
みたらしのたれの零れて秋夕焼　京都　草夕感じ
拾っては松ぼっくりを鑑定す　愛知　上手智子
控へめなラ・セーヌ芦屋川爽やか　兵庫　風待ラテ
秋うらら花束越しの老教授　埼玉　萇崎りん
秋の雨すべり台へと音もなく　兵庫　春の新々
みちのくの気の詰まりたる紅林檎　兵庫　伊集院秀樹

秋時雨個室に猫のぬひぐるみ　滋賀　近江菫花

象逝くや神戸の傷の疼く秋　兵庫　杉浦萌芽

美しきことは罪なり毒菌　兵庫　岩水ひとみ

小骨にも鰯の気骨酒を酌む　神奈川　平野孤舟

秋冷に出で立ち迷ふ朝かな　兵庫　惠島祥一朗

気まぐれのじゃじゃ馬台風おさまれり　兵庫　惠島京子

古稀祝ふ通天閣や実紫　和歌山　中島紀生

木枯やジョーの瞳はかくも澄み　兵庫　キートスばんじょうし

熊眠るアーバンベアは起きてゐる　奈良　豚々舎休庵

落つる陽に紫苑どこまで背伸びする　神奈川　小林　心

橡の葉の大きく秋の兼六園　兵庫　太平楽太郎

頼りなき夫鴻雁来賓す　熊本　貴田雄介

しのゝめに月のことばの漂へる　神奈川　進藤剛至

ひと指に鰯一気に開きけり　神奈川　金子三奈乃